論文

ピアノと電子オルガンによるオペラ伴奏に関する考察

~音楽的自律性と利便性~

森松慶子

【要旨】

電子オルガンを伴奏に用いたオペラ公演には、いく通りかの編成があるが、中でもピアノと電子オルガン1台ずつ、という編成は利点が多い。電子オルガン1台、あるいは複数使用する場合はオーケストラスコアをなるべく忠実に再現することが期待されていることが多いが、ピアノと電子オルガンの場合はむしろ、その編成として最も良い形を目指す、音楽的に自律性のある姿勢で臨みやすい。また、電子オルガンの多彩な音色と、打点のはっきりしたピアノの音質とが補完しあうことで、歌手にとってタイミングや拍がわかりやすく、音響全体としては効果的な演奏が可能になる。さらに、練習場所の確保や楽器の調達、ピアノ伴奏譜付きのヴォーカルスコアを共通の足場にしたスムーズな練習など、制作上の利便性も大きい。送り手にとっても、受け手にとっても、オペラをさらに身近なものとして楽しめるものにするために、ピアノと電子オルガンによるオペラ伴奏、というスタイルは貢献度が高いと考えられる。このスタイルは統計を見る限りでは、さほど広がっていないように思われる。電子オルガンの高等教育の場などで取り上げることも、ひとつの推進力となるであろう。

キーワード:電子オルガン ピアノ オペラ伴奏 ピアノ伴奏譜付きヴォーカルスコア

はじめに

電子オルガンを伴奏に用いたオペラ公演は、近年多数とは言えないながらもコンスタントに実践が重ねられている。

本論ではまず、日本のオペラ公演全体の中でそれがどの程度の割合を占めているのか、といった統計的な事柄を概観し、オーケストラ以外のオペラ伴奏の、いく通りかの編成について整理する。

その上で、ピアノと電子オルガンを使ったオペラ公 演に関して、筆者が自身の経験から実感したことや見 聞したことを交えながら、その意味合いを記述してい きたい。

1 日本のオペラ公演と電子オルガン

表1、2は、昭和音楽大学オペラ研究所が文化庁からの委託で編纂した「日本のオペラ年鑑 2014」(以後「年鑑」と記載)に掲載され、インターネット上でも閲覧できる 2014 年のオペラ公演リスト¹から、筆者が

伴奏形態に着目して作成したものである。

年鑑のリストは、同研究所が把握できたオペラ公演を、客席数 756 以上の大規模会場と、客席数 756 未満の中小規模会場に分けて列挙している。年鑑にはこの2つのリストとは別に、演奏会形式やハイライト形式での上演回数のリストもあるが、今回はストーリーを追って演技も伴う、いわゆる「オペラ」として上演された公演のリストを扱う。

今回除外したハイライト形式、演奏会形式の上演には電子オルガンを用いたものも含まれており、注目すべき公演も少なくない。しかしこれらの形式は比較的上演しやすいので数も多く、本格的なオペラに比べると年鑑に載っていない公演が、電子オルガンの有無を問わず、一層増えることが予想される。一方、正式な「オペラ」としての公演は比較的大掛かりで、上演できる団体はある程度限られ、告知もそれなりの規模になるため、一般の演奏会などよりはその情報が年鑑にも拾われやすい。脚注1でも示した通り、年鑑で今回

¹ 同研究所が、オペラ団体及び制作団体等へのアンケート 調査、出版物などから得た情報をもとに編集している。外国 から迎えた公演も含まれている。必ずしも日本で上演された オペラ公演全てを網羅しているものではない。電子オルガン 関連の資料はエレクトーンシティ発行のコンサートニュース

や月刊エレクトーン、インターネット記事、個人的なつながりで筆者の知る範囲内で別途確認した結果と照らし合わせても、幾つかを除いてほぼ掲載されており、日本のオペラ公演の状況を概観し、その中で電子オルガンによる公演がどの程度あるかを大まかに把握するには有効な資料であると考えられる。

確認できた電子オルガンを用いたオペラ公演数は、電子オルガンを専門に扱う情報源で筆者が別途確認できた公演数とさほど開きがない。筆者が今回確認できた、電子オルガン専門の情報源からさえも漏れている電子オルガンを用いたオペラ公演も存在するであろうが、それらの調査と分析は今後の課題としたい。

以上のようなことを踏まえた上で、今回は、2014年に客席数756以上の大規模会場と、客席数756未満の中小規模会場で行われたオペラ公演について、年鑑の資料をもとに概観する。

尚、このリストでは同じ演目で複数回数上演されたものも、上演回数分を延べ数でカウントしている。

表 1 2014 年 1~12 月大規模会場の国内オペラ公演² 総数 444 件の内オーケストラでない伴奏による公演数

ピアノ1台	65
ピアノを含めた合奏(電子楽器以外)	6
ピアノを含めない合奏(電子楽器以外)	13
電子オルガン2台と打楽器との合奏	3

表 2 2014 年 1~12 月中小規模会場の国内オペラ公演³ 総数 616 件の内オーケストラでない伴奏による公演数

ピアノ1台	279
ピアノを含めた合奏(電子楽器以外)	107
ピアノを含めない合奏(電子楽器以外)	65
電子オルガン1台	5
電子オルガン2台	2
電子オルガン1台とピアノ(含電子ピアノ)1台	12
電子オルガン2台と打楽器との合奏	18

年鑑のリストから漏れている公演もあるが、大まかな傾向は捉えられる。ただしここに抜き出した数字だけでは判りにくい事柄もある。それを補足説明しながら、この表から読み取れることを以下に記述する。

表1では、ピアノ1台での公演が 65 回あるのが目を引く。しかしこのうち 50 回以上が、オペラシアターこんにゃく座による、もともとピアノ伴奏で書かれた作品の公演であり、オーケストラの代わりにピアノを用いているわけではない。またこんにゃく座の他に

²http://www.tosei-showa-music.ac.jp/opera/nenkan/2014/p78-p95_kouen_I.pdf

³http://www.tosei-showa-music.ac.jp/opera/nenkan/2014/p 96-p123_kouen_II.pdf も複数回ピアノで大規模ホールでのオペラ公演をおこなっている演奏団体があるので、2014年に大規模会場でピアノ伴奏によるオペラ上演を行った演奏団体、という数え方をすると、10程度でそれほど大きなシェアではない。

大規模会場で電子オルガンを用いた公演は、このリストでは3件にとどまっている。オーケストラパートを電子オルガン編曲してのオペラ伴奏が、オーケストラとはまた別の音楽的な意味合いを持ち得る、という認識がオペラ関係者の間で一般化すれば、今後大規模会場でのオペラ公演で、たとえオーケストラを使える場合でも、電子オルガン伴奏を選択する、というケースが出てくるかもしれない。さらには、オペラシアターこんにやく座が、座付的な立場であった作曲家、林光によるピアノ伴奏のオペラ作品を上演してきたように、もともと電子オルガン伴奏で書かれたオペラ作品を継続的に上演する団体が出てくれば、電子オルガン伴奏によるオペラ振興の原動力になるだろう。

表2より、中小規模会場の伴奏は、大規模会場より もピアノの占めるウェイトが高い。オーケストラ伴奏 だった作品を中小規模会場でピアノ伴奏により上演す る、というケースは非常に一般的である。電子オルガ ンは、数としてはこちらでもさほど多くはないが、そ れでも大規模会場よりは使われている。

2014年以前の概要についても、参考までに触れておく。昭和音楽大学オペラ研究所がインターネットで検索できるように目下試験的に公開しているデータベースで、2006年から2013年にかけて1年分ずつ「オペラ」「電子オルガン」で検索してみると、例年上記リストとほぼ同じ程度の割合で電子オルガン伴奏によるオペラ公演のデータがピックアップされる。このデータベースに収められた情報の範囲内では目立った増減はなく、ほぼ一定の割合を占めているという印象である。

2 年鑑に見る電子オルガン入りの編成

電子オルガンを用いた伴奏の編成は、年鑑のリストに入っている公演では以下の4通り。

- ①電子オルガン1台
- ②電子オルガン2台
- ③電子オルガン2台と打楽器の合奏
- ④電子オルガンとピアノ(電子ピアノ含む)1台ずつ このうち、③の「電子オルガン2台と打楽器の合奏」

は、電子オルガンを用いた上演の中で最も数が多い。 しかし、前述のピアノ伴奏におけるこんにゃく座とよく似た事情がある。③の編成による公演 18 件の内 15 件は、文科省と各地の教育委員会が主催した学校公演で、同一の演奏団体によるものである⁴。こうした企画に電子オルガンが寄与していること自体は、非常に喜ばしい。ただし、この表の数字だけ見て、電子オルガン2台と打楽器によるアンサンブルでオペラ伴奏をするスタイルが、電子オルガンを使ってオペラ上演をする人たちの間で広がっていると考えてしまうと、少し実情とずれることになる。

電子オルガンは、小さな会場でもシンフォニックな 音響での伴奏が可能であり、室内楽的な息遣いで歌い 手と一体化した演奏をするのに向いている。従って中 小規模会場のオペラ上演には電子オルガンの出番の割 合がもっと高くなるのではないかと予想していたが、 実際に統計資料にあたってみると、そうではなかった。

筆者は、オペラをより多くの人に親しみ深い楽しみとして提供する上で、電子オルガンも大きく貢献できると考えている。現在既に、10年、20年、30年というスパンでそうした働きをしてこられた電子オルガン奏者の方々がいらっしゃる。この方たちの働きが、豊かな形でさらに広がっていくために、何が必要か、という意識を持って、考察を進めていきたい。

3 電子オルガンを用いたオペラ伴奏

1) 電子オルガン2台か1台か

前節で示したように、オペラ伴奏に電子オルガンを活用する実例としては、電子オルガン2台+パーカッション、という編成が公演数としては多いが、この編成による公演は特定の演奏団体によるものであり、この編成で演奏することが一般的であるわけではない。

基本的に、電子オルガン2台を使用する公演は、条件の恵まれた演奏団体にしかできない。電子オルガンを用いたオペラ公演などをサポートする役割も担っているエレクトーンシティ渋谷を利用する団体や、「官」なり、余裕のある「民」なりの支援を受けられる演奏団体でなければ、電子オルガン2台を本番のステージ

4西岡奈津子 「47 都道府県を巡った電子オルガン~オペラア ーツ・カンパニーでの 20 年~」日本電子キーボード音楽学会 「電子キーボード音楽 vol.11」pp. 25-28 に調達して運搬することはもちろん、ましてや練習場 所を (たとえ本番直前の数回だけであっても) 確保す ることは難しいであろう。

電子オルガンが2つ並んでいる場所を探す、あるいは作るよりは、電子オルガンが1つある場所、または、ピアノと電子オルガンが1つずつ並んでいる場所を探す、あるいは作る方が易しい。オーケストラスコアになるべく忠実な演奏を、ということであれば電子オルガンが複数ある方が有利であるが、特別な支援もなく、プレーンなスタートラインから電子オルガンを使ったオペラ公演を企画する際は、電子オルガン1台もしくはピアノ1台と電子オルガン1台、と考えるのが実際的だろう。

2) 電子オルガン1台によるオペラ伴奏

年鑑では、2014年に3件の電子オルガン1台による 伴奏のオペラ公演がリストアップされている。3件と もオーケストラ伴奏されるものとして書かれたオペラ をエレクトーン1台で編曲したのではない。2件は、 もともと電子オルガン1台の伴奏による音楽として書 かれた邦人作品の2回の公演、あとの1件も電子オル ガンと縁の深い作曲家が主宰する演奏団体による、そ の作曲家自身の作品の公演であった。

"電子オルガンは1人オーケストラ"などと言われることもある。実際はそうでもない、と筆者は考えているが、確かに電子オルガンは、交響曲や、協奏曲のオーケストラパートをソロ演奏することもある。

その割にオペラのオーケストラ伴奏を電子オルガン ソロで演奏しての公演がない(少なくとも年鑑では) のは、電子オルガンを起用する場合の最初の発想が、 オーケストラスコアをもとにした、オーケストラ的な 響きの再現にあるからであろう。電子オルガン1台よ りも2台による実践が先行しているのは、電子オルガンにそういう期待やニーズがあるせいかもしれない。

ソロ演奏として演奏表現に過不足のない形にリメイクするつもりでアレンジするのであれば、交響曲や協奏曲のオーケストラパートを電子オルガン1台で演奏することも可能だが、きめ細かく原曲のスコア全体を再現したいとなると、当然一人では手も足も鍵盤も足らない。強弱の起伏やブレスも基本的には電子オルガン1台で1人分の表現になるので、オーケストラで大勢の奏者それぞれの強弱やブレスが出入りする様をそ

のまま電子オルガンのソロ演奏で再現するのは無理が ある。楽器や奏者の不備ではなく、ソロ演奏としては 普通のことである。

それならば最初からスコアの忠実な再現にこだわらず、1台の電子オルガン版として昇華した編曲でオペラ公演を行えば良いのだろうが、統計を見渡す限りでは、これまでのところあまりそういうことは起こっていないようだ。

3) ピアノと電子オルガンによるオペラ伴奏

年鑑が示す通り、中小規模の演奏会場では、非常に多くのオペラが、オーケストラ伴奏をピアノ伴奏に代えて上演されている。有名なオペラは大概ピアノ伴奏付きのヴォーカルスコアが出版されていて便利である。ここに電子オルガンがプラスアルファの要素を持って入る、というのが、ピアノと電子オルガンによるオペラ伴奏の基本的なコンセプトになる。この伴奏スタイルで筆者が重要だと考える点を、以下、ピアノと電子オルガンによるオペラ伴奏に関する、

a)音響と表現

b)歌手にとってのわかりやすさ

c)利便性

に分けて述べる。

a)音響と表現

ヴォーカルスコアのピアノ伴奏は、決してオーケストラスコアを隅から隅まで再現する意図で書かれてはいない。当然省略される要素もある。また、ピアノの減衰音での表現として書き改められる音型もある。オーケストラと似た音響を再現するためではなく、ピアノ版としてリメイクされている。

電子オルガン2台の場合は、前述の通りスコアを分担しあってオーケストラのサウンドを再現する、という発想になりやすいし、もともとそう期待されていることが多いだろう。しかし、同じ鍵盤楽器2台でも、ピアノと電子オルガンという編成では、ピアノが弦楽器パート、電子オルガンが木管パート、と割り振ったところで、オーケストラの音響が再現されるわけではない。また、ピアノが弦楽器のフレーズを演奏していたとしても、電子オルガンも弦楽器系の音色で演奏しながら木管系の音色で木管のフレーズを演奏する方が、音響的にしっくりくる、ということも多々ある。結果

的に、ピアノと電子オルガンの版としての音楽作りを しよう、という発想になりやすいことは、明らかであ る。電子オルガンを電子オルガン以外の楽器の再現の ために使うという感覚よりは、電子オルガンとして最 善を尽くす、という感覚で音楽と向き合いやすい。

筆者が本年機会を得て電子オルガンで参加したドニゼッティの「愛の妙薬」全幕公演5も、ピアノと電子オルガンによる伴奏での公演であった。ピアニストの中村圭介氏は、筆者との最初の打ち合わせの際に、「オーケストラの再現を目指すのでなく、ピアノとエレクトーンのアンサンブルとして一番良い形にしましょう」とおっしゃった。筆者は常に電子オルガンをそのように使いたいと考えて、コンチェルトのオーケストラパートを演奏する際などソリストにもそう説明することが多いのであるが、電子オルガンの外の世界の方から先にそういうご提案をいただくということは稀であり、非常にありがたかった。

実際の準備の中では、ピアニストは基本的にヴォーカルスコアのピアノ伴奏をそのまま演奏し、筆者はオーケストラスコアを参照しながらピアノ伴奏譜に追加したり補充したりする形で音楽を膨らませ、フレーズによってはピアノに休んでもらってこちらが引き受けることも提案しながら電子オルガンが演奏する内容を決めていった。スコアからの追加や補充の際は必ずしもスコアの音型や転回形をそのまま転記したわけではなく、適宜手を加えて、原曲の印象を大事にしながらも、ピアノと電子オルガンのアンサンブルとして自然な姿になるよう心がけた。

電子オルガン2台と、ピアノと電子オルガンのデュオ、いずれも奏者は2人であるから、対話のように演奏する場所を作って伴奏パートにも立体感を持たせる演奏をすることはやりやすい。電子オルガン2台の場合、電子オルガンに慣れていない人にはどちらの楽器からどの音が出ているのかが今ひとつわかりにくい。その点、片方がピアノになれば、電子オルガンがわざわざピアノの音色でも出さない限り、どちらの楽器が演奏している音なのかは、共演者にも聞き手にもはっきり伝わる。その明瞭さは、演奏の説得力にもつながる。譜例1でその具体例を示す。

⁵ 2016 年 8 月 26 日 京都府民ホールアルティ 主催:京都音楽劇団

譜例1は、「愛の妙薬」ヴォーカルスコアピアノ伴奏 譜より、このオペラの序曲の一部分である。手書きの 書き込みは、筆者が電子オルガンパートを演奏するた めにメモしたものであり、非常に見にくいが、臨場感 のある譜面のサンプルということでご容赦頂きたい。

譜例1段目の2、3小節目の一連の32分音符はオーケストラではオーボエとフルートの掛け合いである。

譜例1



ピアノ1台で演奏する場合、このオーボエとフルートの掛け合い部分は、アーティキュレーションやフレーズ感、ピアニスト自身の音色に対するイメージなどでコントラストを表現するだろう。筆者たちの「愛の妙薬」では、オーボエのパート(譜例中の Ob と表記した斜線部分)を電子オルガンのオーボエ音色で受け持ち、フルートのパート(譜例中の FI→Pf と表記したカッコ内のパッセージ)をピアノが受け持った。左手の和音は、ピアノではそのまま演奏し、電子オルガンもストリングス音色で、転回形を若干変えてピアノにかぶせるように演奏して、打鍵後の膨らみや持続などの質感を補強した。

譜例1の上段3小節目の終わりの右手の最後の2音から4小節目の最上声部は、この序曲のテーマのモチーフを演奏するオーボエのパートである。このフレーズは2段目の1小節目で左手に受け渡されるが、この楽譜では2段目下段の最初の2音を弾くとすぐに伴奏形に移行し、オーボエのフレーズは途中で無くなって、後から登場したフルートの細かい動きに集中する形になっている。

電子オルガンでもピアノでも、アンサンブルの音楽をひとりで演奏する際、新しいフレーズが後から重なってきた時に先発フレーズの末尾が曖昧になることはよくある。譜例1では、電子オルガンが2段目1小節目移行のオーボエのフレーズも手書きでメモして演奏、2段目2小節目でオーボエのフレーズが再び大譜表の上段に現れるところまでつないだ。音色的にはオーケストラのものとはまた別の、ピアノと電子オルガンとしての響きであるが、オーボエに割り振られていたこの序曲のテーマの音型を最後まで切れ目なく全うし、その上にフルートの装飾的なパッセージが乗っているというこの部分の作曲者の思惑を、電子オルガンとピアノで生かすことができた。音色よりもむしろその方が音楽にとっては大切であるように思われる。

オーケストラの再現ということになると、電子オルガンが1台であっても2台であっても、結局何かしら省略する、引き算の編曲になる。しかし出発点がピアノ伴奏譜で、ピアノと電子オルガン版として良い形を志向しよう、ということであれば、上記のように、音楽がより立体的なるようなプラス思考の編曲作業になる。もともとオーケストラスコアにあって、省略されたものの一部分を再度取り出して生かすだけのようにも見えるが、再度取り出すための判断や取り出し方に編曲者(多くの場合は電子オルガン奏者)の解釈や嗜好が働き、スコアの要素の機械的な出し入れに終わらないところがこの種の作業の醍醐味でもある。

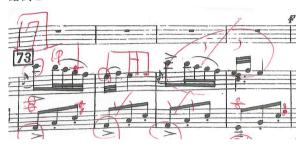
さらに、オーケストラスコアを参照してピアノ伴奏 譜で"完全に諦めていた"要素を復活させつつ、適宜自 分自身のバランス感覚でピアノと電子オルガンのデュ オによる声楽伴奏として良い落とし所を探す、足し算 と自律的な美学を働かせる編曲ができる。譜例2は、 その一例である。

譜例2は、第1幕第5場のカヴァティーナの一部分、合唱の伴奏に当たる箇所である。ピアノがオーケストラの骨組みになる要素を拾って弾いているが、ここにはバンダのコルネットが奏する、リズム感の違う元気なフレーズが重なっている。ヴォーカルスコアのピアノ譜にもこの要素は全く出てきていなかったので、オーケストラスコアを参照してピアノ譜に書き込み、電子オルガンで演奏した。少し見にくいが、譜例2の最上声部付近にある手書きのメモ、

 $\lceil \operatorname{Tp} \ \mathsf{F}(\sharp) \ - \ \mathsf{P} \ \rvert \ \mathsf{E} \ \mathsf{E} \ \mathsf{E} \ \rvert \ \cdot / \cdot \rfloor$

の4小節(2小節パターンの繰り返し)がここでのコルネットのフレーズである。電子オルガンは、コルネットの音色でそのパートを演奏すると同時に、ピアノが演奏しているオーケストラパートも弦・管の音色で重ね、特徴的なリズムを強調した。オーケストラの再現というより、オーケストラで演奏する音楽の内容を、ピアノと電子オルガンのふたりの奏者の生演奏に咀嚼し、ふたり分の音楽として表現し直す方向である。

譜例2



こうした過程や、その結果は、電子オルガンがオーケストラの代用を目指さない場合には、その目標は何であるのか、を考える材料としては重要である。電子的な新奇音ではなく、既成楽器のサンプリング音源を使いながらも発揮できる独自性を見出す契機にもなる。

b)歌手にとってのわかりやすさ

電子オルガンで声楽の伴奏をする際、歌手には電子 オルガンの発音が遅く感じられたり、拍打ちなどが不 明瞭に聞こえたりすることがあるようだ。打弦楽器で あるピアノとの比較であれば、当然そういうことにな るだろう。指揮者を立てない場合、ここが歌手にとっ ての不安材料や、ピアノの方が歌いやすいという電子 オルガンに対するネガティブな印象の素になる。

練習を通してお互いの息遣いに慣れれば、合わせる上で出音の特性は問題にならなくなる。電子オルガンがもっと一般的な楽器になれば、これはこういうものだ、と最初から了解された上でいろいろな人と共演できるが、電子オルガンとの共演経験がない歌手が非常に多い現状では、電子オルガンで新しい人と共演するたびに、お互いに慣れる過程が必要になる。

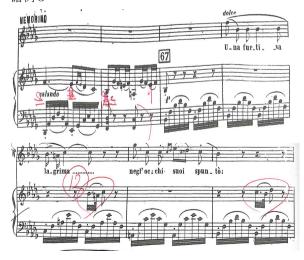
ピアノと電子オルガンによる伴奏ではこの問題は解消される。要所要所でピアノの音が、歌手にとってわかり易いガイドとなるからだ。歌手は安心し、電子オルガンによって追加された音楽的要素を楽しむ余裕も

出てくる。

本年筆者が参加した「愛の妙薬」では、筆者が歌手との合同練習にあまり参加できず、指揮者も立てなかったため、演奏上は、ピアニストが指揮者も兼ねて歌手とのコミュニケーションの要となった。もし筆者が一定以上の回数練習に参加したとしても、電子オルガンとの共演が初めての歌手が多かった今回、音の輪郭がはっきりしているピアノに指揮者的な役割を担ってもらったであろう。

譜例3は、第2幕第8場の有名なアリア「人知れぬ 涙」の冒頭である。前奏のファゴットのソロは電子オルガン、ハープのアルペジオはピアノが担当した。アルペジオは曲のテンポ感や緩急を作る役割を果たす。今回の「愛の妙薬」では電子オルガンの音に慣れていない歌い手がほとんどであったが、音の粒も明快に伝わりやすいピアノで拍節感、推進感を明快に提示していれば歌いやすい。そしてファゴットのフレーズは、電子オルガンの柔らかい音質で演奏するのに向いていたように感じられた。ピアニストが自ら、「ここは電子オルガンにお任せする方が綺麗だと思う」と提案し、アルペジオパートに徹していた。電子オルガンはファゴットパートの他に、曲の途中でハープの背景を埋めに入ってくる管楽器の和音を担当した。

譜例3



また、ソリストとの緻密なやり取りが必要なレチタチーヴォは、今回は練習に密に参加していたピアノだけで担当。歌手の歌い出しの合図になるようなフレーズや、拍打ちの要素もピアノに任せて、電子オルガンは和声感や色彩感、サウンドの厚み、そしてトゥッテ

ィの華やかな印象を主に表現するように考えた。

歌手へのガイドとしてピアノが演奏するフレーズを、 音色や音響効果上の理由で、電子オルガンもダブって 演奏することもある。

譜例4は、第1幕第1場のカヴァティーナの一部である。4小節目からオーケストラでは弦楽器が演奏するフレーズが始まる。この部分では、ピアノは楽譜通りに演奏、電子オルガンは譜例4の大譜表上段、弦楽器パートのフレーズをストリングス系の音色でピアノとユニゾンで演奏し、徐々に木管なども入れて音響を膨らませていった。

譜例4



こうしたユニゾン的な場面では、ピアノと電子オルガンがそれぞれ違うパートを演奏している時よりもずっと "合わせる" 気合が濃厚になり、演奏している側の感触としては、相手の弾いている音も自分の出している音の一部のように捉えられている。

つまり、電子オルガンを演奏する筆者はピアノの音を芯と感じ、ピアニストは、点と点で減衰するピアノの音の間に、ピアノでは音にならないが、ピアニストの内的なイメージとして描いていた線や面、質感を補うものとして電子オルガンの響きを感じて、互いの補完関係を意識しながら演奏を進めていける。それができている時は、共演者には非常にタイミングがわかりやすく、なおかつ色彩感と質感の豊かな音響が得られる。

通常のピアノと電子オルガンのデュオではあえてユニゾンなどで演奏することもあまりないのであるが、今回の「愛の妙薬」では、歌手の多くが電子オルガン伴奏に不慣れだったこともあってユニゾンで演奏してみた箇所がかなりあり、その中で改めて筆者自身が、ピアノと電子オルガンは、音響的には補完関係が成立する、と実感した次第である。

年鑑のリストでは漏れているのだが、奈良には 20

年ピアノと電子オルガン伴奏によるオペラ公演を続けている市民団体、ふたかみ市民オペラがある。この団体で電子オルガンを担当している小林ゆみ氏の記述に、電子オルガンがこの団体に起用された理由や継続的な実践の様子が詳しい。この団体でピアニストとして小林氏とともにオペラ伴奏に携わっている、岡野弥生氏に筆者自身が本年8月8日にお会いした際、本論の参考のために直接伺ったお話によると、電子オルガンが演奏するフレーズでも、箇所によっては歌手から「ピアノもダブって弾いていてほしい」と言われるところがあるそうだ。ふたかみ市民オペラでは、稽古はピアノ、電子オルガンが加わるのは本番直前と本番、という段取りなので、やはりガイドとしてのピアノの音があるほうが歌手は歌いやすいということであろう。

ガイドとしてのピアノの音は、歌手に聞こえていれば客席まで朗々と届かなくても構わないこともある。逆に、電子オルガンが和声感の支えや音の背景を埋めるパッドのような役割で縁の下の力持ちに回る場面もある。また、ピアノと電子オルガンが2台アンサンブルとしてどちらも良い具合に聴衆にも届いているのが良い場面もある。今回の「愛の妙薬」は筆者にとって初めてのオペラ全幕演奏であり、演奏会でアリアを数曲抜粋して演奏するのとは比べ物にならない仕事量をこなすのにまずは手一杯で、これらの可能性を全部十分に生かし切るところまで至らなかった。幸い、同じ演目でほぼ同じキャストでの再演のめどが立ったので、次回は上記のピアノと電子オルガンの役割の交代やバランスの駆け引きに関する積極的なチャレンジをしたいと考えている。

c)利便性

ここでいう利便性とは、演奏の場面以外で、ピアノと電子オルガンによるオペラ伴奏にどのような利点があるかということである。主に制作や段取りの観点からの話になる。この部分で支障があると、実際の公演には至らず、広がってもいかないので、音楽自体から多少離れるが、重要なことではある。

先に述べた通り、電子オルガン2台を使う公演は相

⁶小林ゆみ 「市民による市民のための手作りオペラ〜電子オルガンならではの音楽表現を目指して〜」日本電子キーボード音楽学会「電子キーボード音楽 vol.11」pp 19-21

当条件に恵まれた団体でないとできない。電子オルガン1台であれば、調達はしやすい。とはいえ、やはりピアノのようにある意味インフラが整っている楽器の方が、ホールや公民館、学校の1室などといった、一定以上の広さがある練習場所を確保しやすい。電子オルガンも最近は機種によっては個人が運搬することもできるので、可能ならば搬入して練習に参加できる。

電子オルガンがある場所は企業の音楽教室にしろ、個人宅にしろ、隣にピアノや電子ピアノが並んでいることが少なくない。伴奏者によっては、自宅に電子オルガンとピアノの両方があるだろう。立ち稽古が出来るほどのスペースはないかもしれないが、歌い手個々人がピアノと電子オルガンの音に慣れるための合わせ練習には使えるだろう。

楽譜の点でもピアノはやはりインフラが整っており、 多くの定番的なオペラ作品ではピアノ伴奏譜付きヴォーカルスコアですぐさま歌手と練習が開始できる。オペラ丸ごとの電子オルガン伴奏譜は一般には出回っていないので、電子オルガン奏者は、編曲とレジストレーションの作業をしてからでないと練習に参加できない。従って先にピアノで歌手の練習を進めておければ段取りとしてはスムーズである。

ピアノと電子オルガンによるオペラ伴奏で、基本的 にヴォーカルスコアのピアノ伴奏譜には大きな変化を 加えず、ピアニストは電子オルガンと合わせるときに 必要に応じて部分的に休んだり多少の変更をしたりす る、というスタイルのアレンジであれば、ピアニスト は、いわゆる練習ピアニストと本番の伴奏者をあまり 大きな負担なく兼ねることができる。電子オルガンを 使ったオペラ公演の中には、本番でピアノを使わず、 練習のみを担当するピアニストが1~3名、チラシに 名を連ねているものもある。大きな企画であればそう した陣構えも可能であろうが、そうでない場合には、 なるべく練習に関わる人がそのまま本番も務めるのが 経費の上からは望ましい。また、オーケストラ伴奏が 完成形であれば、本番には乗らずに制作過程を支える 練習ピアニストやさらに専門性の高いコレペティトー ルなどが必要であるが、ピアノと電子オルガンで本番 を伴奏するのであれば、ぜひとも本番に出てきてほし い人材である。

まとめ

電子オルガンに日々関わっていると、ここ 30 年ほどの間に、オペラ伴奏に取り組む電子オルガン奏者の人材は充実し、公演数も年々伸びているように感じていたが、統計の上では公演数は横ばいに近い状態である。とはいえ、小さなシェアながら、コンスタントな実践を重ねているのは明らかで、これは、これまでオペラに関わってきた電子オルガン奏者の方々や関係者の真摯な努力の成果であることは間違いない。

オペラの場合、演奏団体と電子オルガン奏者が二人 三脚のような形で長年に渡って信頼関係を築きながら 公演を続けている例が少なくない。電子オルガンのメ ーカーや教育機関の企画によるものもあれば、市民や 個々人の自発的な企画もある。

この両方が今後も相乗効果的な経過で発展する可能性もある。例えば、文科省と教育委員会の主催による公演で、初めて鑑賞したオペラが電子オルガン伴奏によるものだった、という小学生が、全国にいる。生演奏を味わう、という企画の中で電子オルガンと出会い、アンサンブルの中でその音楽に触れた子供達が大勢いるのである。中には、将来オペラ公演に関わる子供があるかもしれない。その時、市民・個人レベルの企画で可能なオペラ公演の形態として、ピアノと電子オルガン伴奏によるオペラというモデルとそれを実践している団体があるということは、大きな意味がある。

本論で述べた通り、ピアノと電子オルガンという編成では、オーケストラスコアの再現とはまた違う、この編成なりの最も良い形を志向する、音楽的に自律性のある取り組みにつながりやすい。これは、生き生きとした演奏に直結する要素である。

ピアノと電子オルガンによるオペラ伴奏には、こう した音楽的な良さと同時に、公演とそこに至る準備期 間の負担を軽減し、企画そのもののハードルを下げる 利便性が備わっている。筆者も実際自分がこの編成で オペラ公演に関わってみて、オペラをいろいろなとこ ろで上演しやすくする良い形である、と実感した。

この編成でのオペラ公演は、年鑑ではそれほど数が多くないのが個人的には意外であった。音大などで電子オルガンを専門的に学んでいる人に、電子オルガンだけのアンサンブルでのオペラ伴奏ではなく、むしろ、ピアノと電子オルガンでの演奏を経験してもらう方が、社会の中で能力を生かそうと思ったときの受け皿に恵

まれやすいかもしれない。

本格的なオペラ公演に関わり始めたばかりの筆者が 持論を述べるのは僭越であるとも感じたが、初めて経 験することだからこそ違和感や新鮮な驚きとともに気 付けることもあり、慣れてきてそれらが定番のノウハ ウとして意識下に埋もれてしまう前に書いておきたい と考えた。今後のオペラとの関わりの中で、その都度 気づいたことを意識化し、蓄積していきたい。

来春に和歌山県田辺市での公演が決まった筆者たちの「愛の妙薬」では、ソリスト全員が前回の本番で電子オルガンの伴奏を経験済みである。田辺市と周辺か

ら合唱に協力してくださる歌手の多くは、筆者が電子 オルガンで伴奏させて頂いたことがある方たちで、電 子オルガン初体験の他の歌手と筆者の、音楽的、心理 的な良い架け橋の役割を果たしてくださっている。今 後も歌の世界で活躍していく多くの歌手の皆さんと、 電子オルガンを用いた気持ちの良い本番をいくつも経 ていくことで、今後、電子オルガンでのオペラ伴奏を 歓迎する、あるいは、積極的に選ぶ音楽家が増えてく れたら、という思いで、筆者も微力ながら全力を尽く したいと考えている。

参考資料

昭和音楽大学オペラ研究所編「日本のオペラ年鑑 2014」巻末資料「オペラの公演記録」より

大規模会場公演リスト: http://www.tosei-showa-music.ac.jp/opera/nenkan/2014/p78-p95_kouen_I.pdf 中小規模会場公演リスト: http://www.tosei-showa-music.ac.jp/opera/nenkan/2014/p96-p123_kouen_II.pdf 西岡奈津子「47 都道府県を巡った電子オルガン~オペラアーツ・カンパニーでの 20 年~」

日本電子キーボード音楽学会「電子キーボード音楽 vol.11」pp25-28

小林ゆみ「市民による市民のための手作りオペラ~電子オルガンならではの音楽表現を目指して~」

日本電子キーボード音楽学会「電子キーボード音楽 vol.11」pp19-21 -

[Summary]

Opera with piano and electronic organ accompaniment

-from both aesthetic and practical viewpoints-

MORIMATSU, Keiko

"Yearbook of Opera performances in Japan 2014" (edited by Opera Research Center, Showa university of Music) enumerates about a thousand of opera performances which were held in Japan in 2014, and 37 of them used the electronic organ for accompaniment. The rate of utilization of the electronic organ in Opera hasn't increased nor decreased since 2006.

The accompaniment style with piano and electronic organ has advantage to promote the spread of Opera performances. Opera with piano accompaniment is one of popular styles and smooth to execute. Singers are used to piano accompaniment and vocal scores with piano accompaniment are easy to get. The performance will gain rich tone and effective ensemble feeling by adding an electronic organ. Not trying to copy the sound of orchestra but to create renewal version for piano and electronic organ, organists can arrange their own part in the autonomous aesthetic manner.

Students majoring electronic organ in universities generally experience ensemble of two or more electronic organs to perform orchestra part. In this way they can share the orchestra score and reproduce the orchestral sound. This is an important lesson. But we have rare chance to be able to use two or more electric organs after leaving school. If young organists learn to perform orchestra score in piano and electronic organ version, they will play a big roll to spread opera performances.

Keywords: electronic organ, piano, opera, vocal score with piano accompaniment

(音楽ライター、電子オルガン演奏、作編曲 もりまつ けいこ)